窓の女

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
窓の女

【Ｎコード】
Ｎ１６０２Ｆ

【作者名】
悲劇のＭ

【あらすじ】
小説での縛りプレイはやめたほうがいいようです。

会社から帰って来たら部屋ん中が蒸し暑いんだ。
今日も昼間暑かったから熱が篭ってたんだろうな。
エアコンつけて風呂入って、疲れてたから布団に直行して寝た。
数分経つと、エアコンの調子が悪いのかウーウー鳴り出した。
こんな暑いときに故障かよ、と俺は嘆息を漏らす。仕方なしにリモコンでエアコンの電源を切った。
それでも部屋ん中はいつまでたっても冷風来るし涼しい。
しかもエアコンの音は鳴りっぱなし。
リモコンまで逝かれたらしく、音がどんどん低音になってヴーヴー響いてくる。
面倒だったが、コンセントを抜いた。
何かの気配を感じ、ふと窓を見たら髪の長い女が窓枠にしがみついていた。
「う〝ぅ〜・・・う〝ぅ〜・・・」
俺はびびったというより、不思議な気持ちになった。
けど、そいつよくみたら結構可愛かったのよ。
長い黒髪に整った顔立ち、平たく言えば俺のストライクゾーンだった。
恐怖心なんかどこ吹く風で、窓を開けてみたらそいつの姿がはっきり見えた。
「う〝ぅ〜・・・う〝ぅ〜・・・」
まだいってるそいつに、俺は声をかけてみた。
「中、入れよ」
俺が言うと、その女はきょとんとした表情になった。
消え入りそうな声で「おじゃまします・・・」とだけ言って窓を超えて入ってきた。
足が無くて、浮遊していた。

すると彼女は何か思い出したように言った。
「お、おばけだぞ～」
なんかね、思わず笑っちゃった。
可愛いんだ、両手をあげて脅かそうとしてたけど、やっぱり全然怖くない。

「怖くないんだけど」
「う、うるさい、脅かしてんだから少しは怖がりなさいよ」
「だって、君可愛いもん」
思わず口を滑らせてしまい、彼女は怒ってんのか喜んでんのか、どっちつかずな表情で俺を怒鳴りつけた。
「ば、ばか。あんたなんか知らない」
そっぽを向いた彼女に、何を思ったのか、後ろから抱きついた。
もちろん彼女大激怒。
「きゃあ！　何すんのよ」
「すまん、もうすこしこうしててていいか？」
「し、仕方無いわね……あたし、体温低いから、あんたを凍死させるには丁度いいわ」
強がる彼女にきゅんきゅんしちゃって、俺は更に強く抱きしめた。
いつの間にか朝が来てた
なんか彼女が朝飯用意してくれてたけど、作りすぎただけで俺のためじゃないらしい。
彼女曰く幽霊はご飯食べないそうなのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1602f/

窓の女

2011年3月29日22時16分発行